Proof of Alice's Existence

間の間では常識とされていた。 れが『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人 ここではないいずこか、 昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、 それが「発見」されたのはそう最近のことではな いくつも存在し得るといわれる並 此岸に対する彼岸、この世から そ

してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれて だが、 『異界』 が我々を招くことはあれど、 『異界』に対

界』と接続し、その中に『潜航』 我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近しい『異 そのアプロー の探査を開始した。 チを、ごく限定的ながらも可能としたのが する技術を手にした我々

もちろん 『異界』では何が起こるかわからない。 向こう

> 接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、 を待つ死刑囚Xであった。 刑の執行

Xは問題なく『異界』 への参加を承諾した。その心理は私にはわからないが彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェ の探査をこなしている。

を受け取ることで、 とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚 は横に設置されたスピーカー 航』する。Xの視覚は私の前にあるディスプレイに、 寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜 私たちは に繋がっている。肉体と意識 『異界』を知る。 聴覚

挨拶、みたいな……? を過ごしましょう、 くわかったわ」 で何だと思ってたの?」 意味も知らないとは思わなかったわ 「本当に無関心だった、 ー・クリスマス』と同じような、 縁のない祭り、 ハロウィンのこと、 みたいな…… ですので」 ってことだけはよ 幸せなハロウィン ほ 今ま h

の祭りなのです? の祭りと考えられているわ。 いけど、そもそもの起源はキリスト教の影 「概要はこの前伺いましたが、どこが発祥 ハロ ウィンはアメリ アメリカ、 カの影響が強 です ルラン ランド か?

> のことは全く知らない にまつわる問題が根強かったと思 リスの一部として存在する北アイ ませんが、私が捕まった時期は、 スの支配を受け、 「私は、皆さんが、 「どうしてそれはわかるのに、 「イギリスの隣国ですね。 一九四九年に南部 ハロウィ 現在のことはわかり ンに詳しいの ハロ まだイギ 心います」 ・ルランド ーウィン のみ独

日本の祭りじゃないわけで」 が不思議です。お話の通り、 もまるで詳しくないでしょう 「そうは言うけど、 あなた、 日本の祭りに 口

確かに」 初めて気づいた、 みたいな顔しな

Proof of Alice's Existence

ゥ イ ヾ なんでもない日のXと私

2022-10-29 / ペーパーウェル 09 参加作品

シアワセモノマニア

https://happymonomania.com/





青波零也 Aonami Reiya aonami@happymonomania.com Twitter: @aonami



側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。故に、

かくして、 今日の 『潜航』 が、 始まる。

ンは重要な意味を持つ。 で頓着しないところがある。 何せ日本人は、祭りや行事を好 知る者はどれだけいるだろう。 に挑む者にとっては、ハロウィ しかし、我々のような『異界』 果たして、その詳細な由来を 十月三十一日、ハロウィン。 由来や意味にはまる

境目であり、霊界の扉が開か はいくつか存在し、例えば日本 異日の一つなのだ。この特異日と『異界』との境界が薄まる特 秋分前後や、「盆」と呼ばれる なら「彼岸」と称される春分・ されている。つまり『こちら側』 十月三十一日とは秋と冬との 死者の霊が行き来する日と

い、玄関に明かりをつけた家々ら側』の光景とそう変わらな 界』もまた、この瞬間最も『こ 顔の形にくりぬいた提灯-界』との接触に適した日として りを談笑しながら行き交うお化 としたオー ジャック・オー・ランタン-玄関口を飾り付けるカボチャを の立ち並ぶ夜の街並みだった。 に映し出される風景は、『こち いる『異界』の一つであった。 ちら側』との境界が薄くなって 古くから語り継がれてきた。 Xの目を通してディスプレイ かくして、Xが降り立った『異 蝙蝠や蜘蛛の巣をモチーフ ナメント、そして通

旧暦七月十五日前後などが『異 Xの袖を引いていた。 に黒いマントを羽織った子供が ツを被った子供と、カボチャ頭 れる。すると、頭から白いシー たスピーカーが、声を捉える。 けや魔女に仮装した人々の姿。 「トリック・オア・トリート!」 ディスプレイの視線が下げら Xはひとつ、ゆっくりと瞬き Xの聴覚と接続され

という祝祭の基礎知識すら覚束そうだった、Xはハロウィン「ええと?」何、でしょうか」 も、何を意味しているのかはわ決まり文句だとは理解していて ないのだ。それがハロウィンの をしてから、言う。

> 引きながら口々に言う。 「おじさん、何も知らないの?」 すると、子供たちはXの袖を

て空っぽの両手を示す。 るぞ、ってこと!」 いった、とばかりの声を漏らし 「お菓子くれないとイタズラす ああ、とXはやっと得心が

被ったシーツや目と口だけがく顔を見合わせる。その表情はを握っていた手を離し、互いのを握っていた手を離し、互いの て見えなかったが、何故だろ 持ち合わせはないのです」 りぬかれたカボチャ頭に隠され 「しかし、この通り、お菓子

からない程度の知識。 う、にんまり笑った、というこ とだけは、はっきりとわかった。

ジ色の通りを走っていくと、家Xの手を引く人物は、オレン 付けられる。 らも、闇に紛れて曖昧になる。 く、目の前にいる人物の輪郭す かりもここまでは届かないらし りこんで立ち止まる。家々の明 と家の隙間に伸びる細い道に滑 そして、Xの手に何かが押し

「イタズラだ!」

画面に映る二つの小さな体

ぶわりと膨れ上がる。

瞬きのうちに、子供の形をし

を向けたのと、通り側から怪物 位置に開いた穴越しに通りに目 た、白くのっぺりとした仮面。 る。目の前の人物がつけているであることがかろうじてわか だ。奴らが追い付いてくる前に」 のと同じ、目と口だけが描かれ 「さあ、早くそれを着けるん 視線を落とせば、それが仮面 Xが手早く仮面を着け、

い仮面を被った人物がXの手を視線が向けられた先では、白

目の だけどな?」 「ねえ、そこのお仲間さん、お

巨大な手を伸ばしてXを摘まみ

ていた。怪物は長い爪の生えた げるほどの大きさの怪物に変じ ていたはずのそれは、Xが見上

視線が横に逸らされる。 上げようとするが、不意にXの

「こっちへ!」

対、闇の中に浮かび上がる。 オレンジに輝く巨大な目が二 んど同時だった。ぎらぎらと、がこちらを覗き込んだのはほと 「ここに逃げ込んだと思ったん

うな物言いだ。そして、仮面の その姿を認識していないかのよ らしてる人間のおじさんさ」 夜に、お菓子も持たずにふらふ じさんを見なかった? こんな 人物は肩を竦めてみせる。 怪物の目にはXが映ってい はずだというのに、まるで 見てないな。別の場所

を探したらどうかな」 カモだったのにな」とぼやきな 怪物たちは「ちぇー」「い 61

が、それを振り返ることもなく。 ら追いかけてくる気配がする らしい無邪気な歓声をあげなが に駆け出す。二匹の怪物が子供 引いていた。Xは導かれるまま

> が、ろくなものでないことは想 ことで、Xは緊張の糸が切れた 巨体が視界から見えなくなったがらもその場を後にする。その うなものかはわからなかった ちの言う「イタズラ」がどのよ らしく深々と息をつく。怪物た

像に容易かったから。

「おかげさまで、特に何も。 「災難だったな。怪我は?」

外から来たのかな。今夜は、町「その様子だと、あなたは町の に遭わされるものさ」 て丁重に扱わなければ、 的に表に出てくる祭りの日で の裏側に住む『お化け』が大々 かし、あれは、一体……」 人間は連中にお菓子を渡し 目が

していないものは、全部、連中かく目が悪くてね。人間の顔を 笑ったようだった。どういう顔 度の盛大な祭りってことだ」 け』とがともに過ごす、年に一 け』の仮装をして連中の目を欺 のお仲間に見えるらしいのさ」 ているということなのだろう。 で人と人ならざるものが共存し 段は住む場所を分け、年に一度 「そう。仮面を被って『お化 「だが、『お化け』連中はとに そう言って、仮面の人物は 危険はない。人と『お化 『異界』は、どうやら普 仮面、ですか……」 --そういう形 こまらないでくれ」と笑いなが してその視線が合っていたかど ら、顔を上げたXを見る。 に染みるというものだろう。 めて稀なのだ。ありがたさが身 してもらえる、ということは極 せ、『異界』で救いの手を伸ば、Xは深々と頭を下げる。何 だ、是非楽しんでほしいからね」 せっかくいい夜に来てくれたん ん、わからなかったが。 で笑っていたのかは、もちろ いに仮面越しであるから、果た 「ありがとうございます」 「その仮面は差し上げよう。 仮面の人物は「そんなにかし 定かではないが。

「それで、

るつもりだったのが、よかった けて手を振っている。 た。つい、と仮面の人物の視線 夜になるだろう。それに」 ら、あなたも一緒にどうかな」 仮面をつけた女性がこちらに向 れを追う。明るい通りに立 が逸れたことで、Xの視線もそ お話を聞けるなら、更に楽しい の人は珍しいからね、あなたの 「いや、きっと妻も喜ぶよ。外 「お邪魔では、ありませんか」 「妻だ。これから二人で町を巡 「それに?」 少しの沈黙の後、スピーカー 女性の声が聞こえてき 2

「おかしな話だと思われるかも

お互

少しばかり、懐かしい気持ちに 昔に別れた身内に似ていてね。 なったのさ」 しれないが、あなたが、ずっと

だけ共に過ごす

混ざっていた、と感じられたの 「奇遇ですね。私も、そう思っそれから、ぽつりと言った。 かに痛みを堪えるような響きが 柔らかで-ただ、Xの声は、いつになくかどうかなど、知る由もない。 なければ背景も知らない。 ていました」 「身内」と呼べる人間がいたの 私は、Xの本当の名前も知ら Xは「なるほど」と頷いて、 それでいて、 わず X